

## 図書館というトポス (1)

清 水 学

**Library as Topos: A Sociology of Knowledge (1)**

**SHIMIZU Manabu**

## 要 旨

図書館は知の集積所として、分類と秩序の象徴でありながら、人類の文明史に一定の位置を占めてきた。そこにはさまざまな知識の、その物質的形態である書物の、収集・保存・管理・分類・配列・展示・利用というそれぞれの機能が、各時代・地域に応じて託されてきた。

もちろん制度としての図書館をめぐる文化史や知性史の研究は少なくない。本稿で扱うのはそのような制度史でなく、むしろひとつの「社会的表象」としての〈図書館〉のありようである。ひとがその社会あるいは日常を「図書館」のように整序し秩序化するとき、そこで実際におこなわれているのはなにかという知識社会学的問いが焦点となる。

この課題に接近するため、実在する図書館空間のみならず、「図書館小説」という想像的空間が利用される。文学社会学の手法によって「図書館小説」を読むことで、図書館についての社会的イメージが読み解かれる。イメージとしての図書館もまた、いうまでもなくひとつの制度であり、建造物である。それは世界のなかに場所を占める。しかしその空間は、秩序と混沌の異種混淆的な本質をあきらかにするものだろう。この過程を経て提起されるのは、日常的表象である「ユートピア」としての図書館から、「ヘテロトピア」としての図書館への視点の転換である。(本稿はその前半部となる)

**キーワード：**図書館、文学社会学、社会秩序、組織化（整理）、ヘテロトピア

## Abstract

Library has been a locus for human civilization, physically or ideally: a representation of <knowledge> and <order>. This paper proposes “library as topos” from the perspective of Sociology of Knowledge. The social imagery of library may be represented in fictional libraries as well as in real architectures. We shall see some of the “library fiction,” namely fictional works that make some reference to libraries. Procedures in Sociology of Literature may be useful in this respect. We will depict “Social Imagery of Library” as Heterotopic (as M. Foucault used) rather than Utopic.

This is the first part of the article consisting of (0) Library as Topos, (1) The Image of the Library and (2) Reading Library/Library Fiction.

**Keywords:** library, sociology of literature, social order, organization, heterotopia

## 序 トポスとしての〈図書館〉：知識社会学的観点

秩序の問いは、ながらく社会学の根本問題であると語られてきた。この地位はいまでも変わらない。なぜ、そしてどのようにしてひとは、秩序だった社会生活を組織するか。この問いに対し、思弁的な回答がさまざまに与えられてきた。規範的秩序と事実的秩序の区別も試みられた。かくして多くの社会理論は「秩序問題」からその一歩をはじめている。

だが、いぜん残される問いがある。すなわち〈秩序〉の本性とは何だろうか。それじたい、あまりに自明視された無自覚の前提となっていはいはしまいか。あらかじめ特定の秩序イメージが想定され、それとの近似によって秩序化の程度が判定されてはいないか。すなわち「事実的秩序」のなかにすでにして、一定のかなり狭義の規範的概念が紛れ込んではいないだろうか。

「エスノメソドロジー」の問いを開始し、人びとが実際におこなっていることから秩序の、理想でなくその本性をさぐろうとした H. ガーフィンケルは、しばしば引用される一節のなかで次のように語っている。「社会的事実の客観的現実性こそ社会学の根本原理であると教えたある種のデュルケム解釈とは対照的に、社会的事実の客観的現実性を日常生活における協働活動のたえまない達成として……むしろ根本現象とみなすように、教えはとらえられ研究方針として使用される」<sup>1)</sup>。まさに認知的秩序と規範的秩序の代補的な働きのなかに、このエスノメソドロジストは社会の本性をみだし、それを経験的な社会学研究の対象としていったのだった。

さて、その内部に数々の世界をはらんだ〈書物〉という存在を多数抱える、これまた世界の隠喩として役立てられる〈図書館〉の形象は、ひとつの宇宙<sup>ユ</sup>=秩序<sup>モ</sup>であり、「知の殿堂」ととらえられてきた。〈図書館〉はなにより整然とした知の秩序空間と観念される。その内部に世界は収集され、保存され、分類され、配列され、管理され、展示され、そして利用される。知の整序という形式において、われわれの世界の規範的安寧は保たれる。

人類の文明に深く根ざすこの図書館という存在について、本稿では知識社会学の観点から若干の考察を試みたい。すなわち、人間が世界を秩序あるものとして体得し、実際に世界を秩序づけ、あるいはそもそも秩序とは何であるかを想像し感受するためのひとつの装置の働きぶりを、社会学的視点から読み解いていきたい。

ただし現存し利用される図書館、たとえば「利用者調査」の対象とされるような図書館がその主たる対象となるのではない。むしろ空想やイメージのなかに存在する〈図書館〉という表象、秩序の代表としてのそのたたずまいが問題となる。したがって、建築されずに終わった設計案や、フィクションのなかの建造物、また実在する建築の逸脱的な形態も、ここでは積極的に探求されることになるだろう。むしろイメージ的な形象においてこそ、秩序の姿はよりよく表現されるともいえる。

というより〈図書館〉とは、まさにひとつの「理想」なのである（この意味で「理想の図書館」がしばしば語られることになる）。ひとつの知の空間ともいべきもの、分類と整理と配

列のイメージとしての図書館が問題となる。それはまさにデュルケム的な社会表象であるといつてよい。たとえば W. F. パーゾールが「図書館のような機関は、歴史ばかりでなく神話をもつ」と指摘しているのはこの意味である<sup>2)</sup>。

ただし現実の存在であろうがなかろうが、いぜんとして建造物としてのその実在が問題とされる<sup>3)</sup>。図書館制度についての文化史的、知性史的側面からの研究は少なくないが、たとえば図書館建築に的をしぼり、その社会的意味を探究する研究はさほどみられない。本稿では「図書館は場所をもつ」というテーゼから検討をはじめよう。いうまでもなく図書館とはひとつの実在的場所にほかならない。ひとつの施設であり、建築物であり、公的存在であり、制度的身体を備えた空間である。

きわめて「実用的な目的を持つ建物」としての図書館にしばしば「象徴的な重要性」が加わり、「本来の情報の保存という目的を超えて文化的アイデンティティを表現する」ようになるのはなぜか、と問うことから始めるべきだろう<sup>4)</sup>。そして、そのような「象徴性」を帯びたものとしての図書館の実在性、ひとつの実在するイメージとしての存在を問題としなくてはならない。これまたデュルケムに倣って、シンボルの実在性というべきか。ひとはこれまでも、ひとつの観念空間のなかに図書館という施設を配置してきた。この観念空間は、けっして社会から遊離した抽象的なものでなく、あくまで社会のなかに「場所」を占める、その意味で実在的なものでなければならない<sup>5)</sup>。これが場所としての図書館という意味である。

こうした議論の発端のひとつには、ヴァーチャルな「電子図書館」への流れに抗する「場所としての図書館」という思想があるが、この場合の「場所性」は現実に建造された建物にかざられる必要はないだろう。空想のなか、フィクションのなかで、イメージとして存在する建物の実在を問う立場がありうる<sup>6)</sup>。これはかならずしも「サードプレイス」といわれるときのような「居場所」の機能を意味しない。昨今の「開かれた図書館」が備えるべき性格として企図されることの多いこの特定の機能に対し、根本彰も「機能的な概念」としての「場」ではなく「あくまでも設置される場所や建設される建物を中心にしてとらえ直すことに意義がある」と、この語の用法にあらためて注意を促すのだった<sup>7)</sup>。

したがって、ヴァーチャル空間の不毛な抽象性に代え、具体的な場所性の価値をことさら強調しようというのではない。むしろ電子図書館のような空間においてさえ働く場所性の力を認識することで「場所」の概念をとらえなおし、同時に図書館という社会的表象のもつ広範な意味を考察することが目的である。世界はときにブッキッシュなものであるが、その空間すら社会的に形成される。すなわち知識社会学的観点が必要とされるゆえんである<sup>8)</sup>。

## 1 図書館のイメージ

「楽園を一種の図書館のようなものとして思い描いていた」のは、アルゼンチンの国立図書館長の職にあった作家 J. L. ボルヘスである<sup>9)</sup>。想像的楽園をひとつの実在的施設にたとえようというのは一般的でないかもしれないが、逆に図書館という施設をひとつの楽園として心描くものなら多いのではなかろうか。たとえばヴェンダースの映画に登場していたのは天使たちで、ベルリンの国立図書館をめぐらし、その姿を目にすることはできない利用者たちの心の

声に聞くともなく耳を傾けていたのだった（『ベルリン・天使の詩』西独・仏、1987）。

天国のような図書館といえば、『ハリー・ポッター』シリーズの作者が居を構えていたことでも知られるポルトガル第二の都市ポルトには「世界で最も美しい書店」のひとつが存在し、その中心に位置するのは「天国への階段」なのだった。観光客でにぎわう通りに開いた正面から一歩足を踏み入れると、いやおうなく目に飛び込んでくるのは店内中央に座した壮麗そのものの階梯である。二重螺旋のようにもみえるそれを上れば、劇場の回廊のような壁面書架の列が広がり、配架された書物の群れがまるで内部装飾の一部であるかのように色彩を添える。だが、それはけっして装飾でなく商品としての書物であるという事実がひとに当惑をよびおこし、この場所がほかでもない「レロ・イ・イルマオン書店」であることを（もちろん厳密に言えば図書館ではないが購入目的の客は少ない）想起させられるのである。

「楽園としての図書館」の表象には、もちろん華麗な内部装飾や立ち並ぶ書架の列が一役買っているに違いない。昨今とみに出版されている図書館写真集のたぐいにもあふれているように、それらは観光資源のようにまずもって観賞に供される存在である。図書館空間がまさしくイメージとして、消費の対象とされていることがうかがえる。

その意味では、海野弘も述べるように「劇場性」や「視覚性」においてバロックの図書館に如くものはない<sup>10)</sup>。その後のロココ様式への改装も華を添え、プラハの修道院図書館やウィーンの宮廷図書館、ザクト・ガレンやメルクの修道院図書館など、いかにもその視覚性に満ちた荘厳さで観光客たちを圧倒している。

他方、新大陸では、十九世紀末から二十世紀初頭にかけてのカーネギー図書館をはじめ公的図書館に多くみられるように、新古典様式の正面や装飾を備えた図書館建築が象徴的存在感を放ち、根本も観察するとおり、近代的機能重視の実用空間にあってさえ、あたかも図書館はひとつのイマージュでなければならないかのように君臨しつづけているのである<sup>11)</sup>。

バロック様式や古典主義とはほど遠いものの、先だって閉館した天津濱海図書館（2017）の「近未来的」な空間は、「本を読む人より写真を撮影しに来る人のほうがはるかに多い状態」を招来し、「図書館の役割」にまつわる種々の議論をよぶにいたった。もちろん映画やドラマの撮影ないしモデルとされた現場においてはしばしば生じている事態である。付け加えるなら、その開館時点で天津の図書館に並ぶ多数の「書物」は、書棚の背板に印刷された画像であったそう<sup>12)</sup>。

では、こうした「見映え」や「衒示」のための図書館はその本来の役割にもとるかといえば、必ずしもそうではない。図書館の本質というのはなかなか困難な問いだが、J. W. P. キャンベルによる瀟洒な「世界の図書館の歴史」などをみれば、そもそも図書館は見せるための施設であったことが数多く例証されている。「書物の文化史」や「図書館の制度史」と銘打たれた研究の数あるなか、この労作が「図書館建築」の知識・文化史的研究としてみずから特徴づけているのは「人に見てもらうために設計された図書館」への焦点である。たしかにアレクサンドリアの時代から、図書館とは「あらゆる知識を網羅しようとする人間の努力」の産物であり、「世界中の本を一か所に集めることで知識をわがものにしたい」という欲望は「歴史を通じてくりかえし立ちあらわれるひとつのテーマ」であった。しかし同時に、その華麗な図版資料の

数々を眺めるなら、「彼らは本を所有したいと願うだけでなく、それらを並べる美しい図書館を作りあげたいと思ったのだ」という言葉も、おのずと説得力をもつだろう<sup>13)</sup>。

現在でもインテリアショップやモデルルーム、あるいは流行りのカフェやロビーなどで目にされるように、外装だけで中身のない（ときに数冊分がひとつつながりとなった）フェイクの書物や、内容やジャンルを度外視した色彩豊かな書物が並ぶ書斎の事例にはことかかない。このようにインテリアの一部として役立てられる「図書の集積」を、現代的にマニュアル化したガイドブックすらある<sup>14)</sup>。もちろん今に始まった話ではなく、かつての王侯貴族の図書館や書斎においても外見だけの「書物」が展示されることは少なくなかったようだ。当時の書物の流通量や価格を考えればなおさらで、権勢をたもつに十分な量の実物はなかなか手に入らなかったことだろう。

B. マックの興味深い指摘によれば、十五世紀イタリアの書斎はすでにして読書のためのものでなく、「図書室として機能することを決して意味せず、あたかも機能するかのように装っただけであった」という。蔵書はむしろ家財として考えられ、「書斎の家具や備品と似たもの」つまり衒示目的のもので、「図書は学術を物理的に具体化し、所有者の知的アイデンティティを創る」ことに寄与した。そして「収納している蔵書と同じように、書斎自体が学術的活動を象徴する」ための「収集と展示のスペース」とされた。「書斎は研究の演技舞台として構想され、所有者はその光景を完成するために単に椅子に座っていればよかった」のである<sup>15)</sup>。

そのような「見せる」ための図書館ないし書斎においては、内部に深遠な知識が刻み込まれ文字どおりひとつの宇宙がそっくり埋め込まれたものとしての〈書物〉は、マイクロコスモスとしてひとつの世界（観）を反映することが期待されている。そうであるならこれは、むしろその「本来の用途」にかならずしも離反しているわけではないのかもしれない。

U. エーコによれば、蔵書やリストのように大量の物を並べて見せるという行為が示しているのは、「皆の手に届く豊富な物と消費で成り立つ世界が、秩序ある社会の唯一のかたちであり、ほかのかたちなどありえない」というメッセージである<sup>16)</sup>。とうぜんそれが配列される陳列棚や書架もまた、単純に機能的な什器でなくさまざまな象徴的意味合いに彩られたものとなる。まして、それが設備された図書館や博物館という場所にしてをやである。

このような視覚効果を最大限に得るためには、壁面配架のいわゆる「ウォール・システム」が必要で、これは粘土板や石板、またパピルス、各種皮紙等に記された巻物や大型本の時代から、グーテンベルクを経ることによって生じた書物保管上の革命に属する。壺のなかや棚に横置きで整理されていた古代、鎖につながれ書見台の斜面机に置かれていた中世写本の時代から、小口そして背を見せながら縦置きに配架することが可能となった冊子本の普及によって、書架とそこに配架される書物は、視覚上、根本的な転換を経験している。

かくしてバロック図書館の壮麗にいたる。私たちの書庫がしばしばそうであるように、配架された書物がいっせいに背を手前に向け、部屋の壁沿いに並んだ書架の棚上に縦置きにされ、その内容のみならずサイズに応じた区分とともに分類され、整然と何列にも立ち並んでいる風景は、この時期にはじめて一般化したものである。書棚に整然と並べられた「多数」の書物は、その背中によってまさしくひとつの「イメージ」となる。それはもちろん〈世界〉の、〈宇宙〉

の、そしてそれらを統べる〈知識〉のイマージュだった。

さきの海野が指摘するように、同時にそれはひとつの「舞台空間」であり、そこには「人類の叡智の全歴史のスペクタクル」が展示されていた。「バロックの図書館の理想は百科全書の空間である。図書館には宇宙の森羅万象がすべて反映されていなければならない。この空間でまず大事なのは〈分類〉である。本の分類は世界の分類であり、この世界の構造をそのままあらわしているのである」<sup>17)</sup>。

たとえばマドリッド近郊エル・エスコリアル図書館を訪れば、「七つの学芸」をそれぞれ表意するフレスコ画が、書棚の上部から天井までを覆っている。その下、小口を前に配架される書物の分類を視覚的に表示、「つまりアレゴリの体系で本の宇宙を目に見えるものとする」わけだが、このとき「分類」の営みそのものが視覚的表現において実感され説得力を得る。同時に「天国」としての図書館はまさに光と色彩にあふれた秩序の空間として立ちあらわれる。このとき図書館は、なにより知識という光によって設立される秩序の場所だった。これによって分類され整序される空間の劇場性が、その「知」の装置としての経験を保証したのである<sup>18)</sup>。

〈世界〉と〈書物〉そして〈図書館〉の、この果てない照応関係のうちに、われわれ世界内存在は「知」に親しいものもそうでないものもひとしく魅了されてきた。修道院図書館の華麗な広間にしばしば配置される地球儀や天球儀の存在は、ヴンダーカンマー以来の伝統でもあるのだが、この小宇宙のなかに反映された大宇宙を想起させる装置として機能する。それはなにより〈知〉の宝庫であるが、それ以上に物質的存在であり、ひとつの建築的構造物であることにもあらためて想起をめぐらせておこう。

このように「見せること」「魅せられること」ぬきに、図書館的空間を論ずることはできない。海野もいうように、バロック期の絢爛豪華な図書館にまさるものはないかもしれないが、古今東西、実在する図書館ばかりでなく、じっさいには竣工しなかった建設案であれ、フィクションのなかに想像的に存在する図書館であれ、なによりその〈イマージュ〉が、建築物としての形象において、ひとつの社会的装置として作動している。もちろん装置が喚起するのは、いわく「知の殿堂」「知識と秩序の空間」という社会的表象であり、こうした場所として図書館は存在するのである。

それは世界を収集し、分類、整理、展示する装置であり、かつみずからがそうした装置であることを世界に示す、そのような場所である。したがってキャンベルがこう展開するのは正しい。「21世紀の図書館はたんなる本の保管所ではない。それは本の保管、配置、展示をテーマにした美術館〔博物館〕なのだ」<sup>19)</sup>。ただし、みてきたようにこの時代限定はおそらく解除されるべきである。アレクサンドリア図書館とムセイオンとの関係を想起するまでもなく、図書館は、少なくともそのイマージュにおいては、最初からミュージアムであったのだ。

〈図書館〉あるいは〈書物〉といえ、とかく夢想的な文化史の対象であり、あるいは対照的に物欲と権力の象徴とされたりもするのだろう。しかしここでは若干異なる観点をとりたい。とりわけ社会学の営みのなかであまり居場所をもたないような、夢想的現実性ともいえるべき観点である。すなわち、夢想は社会のなかで一定の場所を占め、一定の仕方条件づけられている。〈秩序〉の夢想もまた同様である。

秩序の象徴としての図書館という夢をめぐる社会学、それがここでの課題である。われわれはこの企てを、「図書館小説」とでも名づけうる領域において遂行したいと考えている。すなわち、多かれ少なかれ図書館を舞台とし、あるいは図書館のイメージをめぐって紡ぎだされた、〈図書館〉をテーマとする小説群のことである<sup>20)</sup>。

ボルヘスの同郷人 A. マングエルは、図書館の体験は書物の体験に似ていると語った<sup>21)</sup>。ひとつのマイクロコスモスとしての書物を集積する図書館という場所が、それじたい世界を反映するマイクロコスモスとして存在する。現実世界に場所を占めるテキストとしての書物を読み解いていくように、場所としての図書館を読み解いていこう。そのためにまずは、図書館を読む装置としての図書館小説が最適ではないだろうか。

「建築を読む」という営みについては、すでに建築論の分野で種々議論されているところである。なかでも五十嵐太郎は、映画のなかに登場する建築のイメージ、あるいは映画的に形成される建築のイメージという興味深い問題設定をおこなっている。そこでは映画を読むことを通じて建築が読まれ、建築を読むことを通じて映画が読まれる<sup>22)</sup>。あるいは空想の建築、不可能建築、失われた建築をめぐっても、種々のことが費やされてきた。こうしてイメージとしての建築は、まずは読まれるべき対象となる。図書館のイメージもまた読まれなければならない。

問題は〈図書館〉というひとつの社会的な表象である。図書館学や博物館学の教えるように、図書館や博物館本来の役割が数あるなか、「見せる」ことはその一部の機能にすぎないだろう。「魅せる」こととなるとなるとおさらだ。だが本稿にとって重要なことは、本来そのように意図されたものでない施設であったとしても、図書館がなぜか「見せる＝魅せる」ものとして存在しているという事実である<sup>23)</sup>。

それは、こういってよければ社会の空想的秩序である。じっさいに「利用」するばかりでなく、利用できない図書館もまた逆説的に意味をもつ。「読めない書物」と同様である。P. バイヤールが語っていたように、書物は読まれなければ読まれないほどその宇宙は広がっていくのだ<sup>24)</sup>。われわれは、読まないことも含めて図書館を読んでいかななくてはならない。図書館という場所を読む営みとは、そのような企てである。

図書館（建築）のイメージについても、まずは映画の分野で意識されてきた。「見せる」ための図書館が具現化されているのは、なにより映画のなかの装置としてであろう。飯島朋子の著作は多分にカタログ的なきらいもあるけれども、いちはやく「図書館映画」の名称を使用し、われわれにとって先駆となる業績であることに変わりはない<sup>25)</sup>。古今東西、さまざまな映画のなかに登場する図書館は、ときに背景となり、ときに大道具となり、そしてときには主題となって、私たちを魅了してきた。ちょうど映画のなかに登場する〈都市〉がしばしば、その映画の本筋や人物たち以上に魅力をもって訴えかけることがあるように、映画内建築とりわけ図書館もまた誘惑的な装置となる。

同様に「図書館小説」について語ることができる。映画と同じように、それに先駆けて、小説もまた魅力的な都市や建築を、ときに背景としときに主題として印象づけてきた（「言語都市」ともよばれる）。ここでは都市も建築も、読まれるべきものとして実在する。みたように、



書物を展示するその空間じたいが展示され利用されているということは、図書館が読むための場所である以上に読まれるべき場所として存在することを意味している。図書館小説は、図書館の読み方について教える。図書館小説を読むことで、われわれは図書館を読むのだ。

そしてここに提起されるのは、あらためて「場所としての図書館」の問いである。われわれはすでにその途上にいるわけだが、さまざまな図書館のイメージを解説する旅へとしばし出かけてみよう。まずは図書館小説のなかへ。

## 2 図書館を読む／図書館小説を読む

図書館には、存在それじたいで人びとを魅了するものがある。たとえば映画のなかに描かれる図書館、それを観たものたちが語る図書館は、実物的存在感を伴う。みたように「図書館映画」において〈書齋〉や〈図書館〉はひとつの「場所」として、舞台装置として登場する。ひとはそれを主題として受け取るわけではない。しかし飯島の労作などをみれば、その実在性こそが語られるべき対象としてひとを喚起し魅了していることがわかる。

読まれるべき図書館は、読まれる前はただそこにある。そのイメージはまずモノとして存在する。ちょうど読まれるべき内容以前に、書物の「物質性」が語られねばならないように<sup>26)</sup>。

図書館の本質は「ただ存在する」ことにある。アメリカ議会図書館長を務めた詩人 A. マクリーシュのこの言葉を引用しながら、先のパーズールは昨今の「電子図書館」をめぐる種々の議論をレビューするなかで、「場所としての図書館」の意義をあらためて強調していた。彼自身のものを含め多くの図書館経験に共通するのは、きまって「大きな閲覧室」であり、「大きな木製のテーブル」「背の高い書架」「丸天井のある大理石の建物」という風景であり、「そこにいるだけで感じられる楽しさ」だった<sup>27)</sup>。これが、たとえヴァーチャルな電子図書館の時代を迎え、「書物」が「情報」に還元されてしまう環境になっても変わることのない、図書館の「場所性」だというのである。

とりわけ全米各所に散在するカーネギー図書館建築はその最たるもので、「これら「学びの寺院」の入り口へ導く、高い天井、壮大な玄関、急な階段」こそが、その「場所の感覚」を意味していた。「場所の感覚は実在するものである。それは、聖なるものと俗なるもの、想像上のものと地理上のもの、自然なものと建築されたもの、知的なものと感性的なものとの組合せである」と、パーズールはいう。

E. クレイジャズによる図書館小説の白眉のなかで、そんなカーネギー図書館のひとつに七人の司書たちは住んでいるのだった<sup>28)</sup>。「町の向こう側、コミュニティセンターとショッピングモールのすぐそば」にできたばかりの、現代的な設備を備えた最新型の図書館と対照的に、町はずれの崖の上、森に囲まれて建つその施設は、

赤レンガと粗い自然石の壁で、小塔と広い窓が木々を見おろしていた。内部では緑色のガラスシェードをかぶせた読書灯がオーク材のテーブルにあたたかな黄色い光を投げかけ、そのまわりをスピンドル椅子が取り囲んでいた。

木のぎっしり詰まった黒ずんだ書架は、型押し模様のある錫の天井まで届く高さだっ

た。床は木で、玄関ロビーだけが白茶色の大理石だった。時計のチクタクいう音と、厚紙のカードにゴム印を押す静かでリズムカルな たん という音が、ここで聞こえるいちばん大きな音だった。

何もかもが小ぢんまりとしていて、整理がゆきとどいていた。

司書たちは「新しい図書館」の開館日、みずからの居場所である修道院めいた旧図書館の扉を固く閉ざし、そこにこもって暮らしはじめるのだった。ある日のこと、貸し出されていた蔵書の延滞料金の支払い代わりに、ひとりの赤ん坊が届けられる。その日以来、七人の司書たちと赤ん坊との奇妙な共同生活が始まった。どこかでいつも夢見られていたような、そんな秘密の図書館とそれを住みかとするものたちとの物語が、こうして紡がれていく。ここでは図書館は昔ながらの「整理」と「秩序」の空間である。司書たちはそれを愛し、そこを自分たちの「場所」と定める。

だが図書館のなかには「秘密の通路」や「見たことのないアルコールや物置」があり、「時間は自在に伸び縮み」する。たとえば〈一般開架室〉は「探検」すべき「迷路」と称される。そんな空間のなかで成長した赤ん坊ディンジーは、自分が育てられた、それ以外に知らない、このブッキッシュな世界に疑問を抱きはじめる。司書たちがいうように「あなたは図書館の中にはいたかもしれないけれど、図書館と一つではなかったの」かもしれない。たとえば「分類も行きすぎると逆効果なんじゃないか」、そう思い自分の基準で手近なものを「整理」しなおすのだが、それは「正しい秩序」ではないと司書たちにたしなめられる。とはいえ司書たちは司書たちで、それぞれの「分類学上のバトル」をたたかわせているのだった。

やがてディンジーは、ずっと禁じられていた地下の〈書庫〉へと忍び込む。「地下に広がる暗闇は危険で恐ろしかったが、同時にわくわくもした。<sup>テラ・インコグニタ</sup>未知の領域だ」。書庫の内部は七層にわたる「迷路」ないし「別世界」で、しかし「道に迷ったわけではない。でも生まれてはじめて誰の目も届かないところに身を置いて、それが彼女を楽しませた」。

そんなディンジーが、やがて「外」の世界に興味を抱きはじめるのも、もはや必然とよぶべきか。司書たちによってひそかに企画された引き継ぎ儀式の日、彼女はそれを拒絶することを決断する。そして司書たちが「混沌」とよぶ外部世界へとディンジーがその一歩を踏み出す場面で、図書館で育った少女の不思議な物語はいったん終わりを告げる。

図書館は「ある秩序が支配する静謐な場」であると、ボルヘスは形容していた<sup>29)</sup>。ここにも典型的なひとつのイメージがあり、それは混沌に対する秩序、喧噪に対する静穏、動に対する静の空間として存在する。すみずみまで整頓され、分類され、あるべきものがあるべきところに収められている空間が、外的世界と隔離されたまま、世界の秩序を反映している。「西洋文学の伝統において、図書館は長いあいだ秩序と合理性のメタファーとしてとらえられてきた」と、G. ラドフォードが指摘するとおりである<sup>30)</sup>。

ところでこのような秩序の体系は、いうまでもなく西洋思想史のなかに特定の位置を占めている。それを知るに、南海に浮かぶ小島ベンセレム、その中心に置かれたいまひとつの秘められた館を訪問するに如くはない<sup>31)</sup>。いわゆる「科学革命」の運動を導いたとされる、十七世紀

初頭に書かれた未完のユートピア小説、同時にひとつの博物館小説として成立するその物語の末尾近くに、この建造物はようやく姿をあらわす。『新機関』や『学問の進歩』などで知られるF. ベーコンが、その学問体系の分類法や知の系統樹の観念とともに構想した架空の施設、それが「ソロモンの館」である。

ベンセレムとよばれるこの島について世界はほとんど知るところでない。だがその住人たちは遠い異国のことをすでに承知している。まるで「他人には隠れて見えないでいながら、こちらからは他人がまる見えで、光の中にさらされているように見える」というのである。その秘密は、「光の商人」とよばれる使節によってもたらされる外界についての情報にある。世界から収集された「光」が、この島に、この館に集中されるのだ。

ここではもちろん「光」こそ「知識」の別名である。ソロモンの館は一種の研究機関であると同時に博物館である。富永茂樹は知識社会学の立場から、その「知の装置」としての側面に着目した。「あらゆる学問の成果を収集し展示するこの一種の博物館は、光の空間であるベンセレムの島の中心をなすソロモンの館の、そのさらに中心にあって、学問それ自体を象徴するような存在であった」のだという。

ここで富永は、「科学の地理学」に近い観点を提示しているといえる。クーンによる「パラダイム」概念のより物質的な側面に光を当てるD. リヴィングストンによれば、博物館とは、個々の品々を分類、位置づけ、系統づけを通して空間配置することで「現実を再構成」する場所であり、「解釈実践の場」でもある。じっさいに実験室は劇場の役割を果たしていたという。「博物館の劇場性は、集積し秩序づけ範疇に分けてあらゆる種類の展示物を陳列することによって表現される」のである。たとえば「錬金術師の小部屋」であり「蛍光灯に煌々と照らされた清潔な実験室」であり、そしてこのソロモンの館であろう<sup>32)</sup>。

富永もまた、いくつかの博物館を実例に、博物館や図書館という施設が「ただ学問に従属してその所産を示すだけではなくて、学問のありようそれ自体を体現する」こと、そしてそれ以上に「それが存在しなければ学問そのものも存在できない、ただの手段や器以上の存在であること」を主張する。図書館（博物館）小説を読むことを通じて、図書館（博物館）を読むことを教えられ、図書館（博物館）をつぶさに観察することを通じて、観察するとはどういうことかを教えられる。「ソロモンの館」をめぐるツアーも、かくして教育的導きとして仕掛けられているのである。

ベーコン没後もこの「光の館」の構想は、現実の制度ないし施設に受肉化され、ロンドンのロイヤル・ソサイエティやパリの科学アカデミーの発足、オックスフォードのアシュモリアン博物館やボドレイアン図書館の開館、さらにはローマ教皇やメディチ家の収集品、ハンス・スロウンのコレクションなどを基にした数々の博物館の展示公開、と無数に指摘しうる。カピトリノー、ウフィッツィ、大英博物館やルーヴルとあげていくなら、もはや今日知られている同種の施設をすべて列挙せねばならないだろう。

かくして「ソロモンの館」は、まさしく「空間=装置」として存在していた。そこには「人間の知識がただの手段にはとどまらない社会装置をとおして、あるいは装置とともに呈示される様子」が描かれている、と富永はいう。それはいかなる「装置」であったか。まさしく「知

は力なり」を証示し、さんざん勿体ぶられながらもしっかりと一行が案内される、ひとつの劇場的機能を備えた知の装置だったのである。

ペーコンに由来する学問の体系はもちろん、一方ではデイドロとダランベールによる『百科全書』の構想に大きく影響を与えたことが知られている。その詳細に立ち入る余裕はないが、ここでわれわれにとって重要であるのは、ペーコンによる知の体系と分類の構想が、百科全書と万国博覧会という知の装置を支え、遠く新大陸で1876年フィラデルフィア万博として体現され、その展示空間を体験した M. デューイ発案による図書十進分類法にまでたどりつくという、遙かな知の系譜学である<sup>33)</sup>。この系譜はつまり、いまだに図書館空間の秩序形成において中枢を占め、現在の私たちのものでもある図書館生活とともにあり、そしてそれを支配している。デューイのスローガンは、「最高の読書を最大多数の人々に最小限のコストで」というものであった。私たちは好むと好まざるとにかかわらず、図書館を利用するたびにこの分類空間と関係せざるをえないのである。

図書館の秩序を支える大きな中心が「分類」であることはいうまでもない。「分類」することにより「見せる」ための空間が可能になる。そして前章にみた「知の秩序」を示すバロックの分類のアレゴリーは、『百科全書』のよく知られた扉絵にも受け継がれた。

さらに近代的な「見せる空間」の設計は、第二帝政期1867年のパリ万国博覧会の展示空間に及ぶ<sup>34)</sup>。シャン＝ド＝マルスの丘に設けられた展示場では、楕円形の建物の内部、中央の温室庭園を囲んで、複数の回廊が同心円状にめぐらされた。各回廊は内側から順に芸術作品、文化教養、家具…といったぐあいに展示品の種類を区分するテーマと対応しており、さらにそのうえに放射状の軸に沿って諸々の国と地域が区分して配された。すなわち、「物品は、品目別に八つの同心円的な回廊に配分された。主軸から……一二の通路が枝分かれしていた。主要国は、二つの通路にはさまれた扇形の区分を割り当てられた。その結果、回廊を歩いて、さまざまな国におけるある一つの産業の在り方を見学することもできし、横に通っている通路を歩いて、それぞれの国における産業のさまざまな分野を見学することもできた」という<sup>35)</sup>。その後の展示空間の祖型ともなるべきこの場所において、「世界の分類」が視覚的に提示された。それはまさしく、学問の体系や系統樹の視覚的表現だった。

こうした分類区分を照らしだし可能にする、さらに原基的なアレゴリーはいうまでもなく「光」である。「ソロモンの館」はなにより「光の中心」であった。それをじっさいに訪問してみると、いかなるイニシエーションが待ちうけているかと想像するのも心惹かれる経験だが、これを想起させてくれるような建造上の仕掛けも実在する。さしづめグンナール・アスブルンドの設計になるストックホルム市立図書館（1928）、またそれを参考にしたと思われるスロヴェニア国立図書館（1941）の体験がそれに相当しよう。

スロヴェニア国立図書館の場合、モダニズムの様式ではあるが、黒大理石の回廊を歩いて内部へ進入するさい、暗黒から光へという象徴的空間の階梯を一步一步足を進めていくような設計が施されている。設計者の「プレチニクは建築がもつ象徴的な力を強く信じており、階段を上ることで無知の闇から知識の光（閲覧室）へと上昇する感覚を来館者に与えようとしている」とキャンベルはいう<sup>36)</sup>。ひとはこの通廊を通り図書館内部へ足を踏み入れるたび、煌々と降り

そそぐ光＝知識を一身に浴びるのだ。「光」としての知識を所蔵する図書館、そしてそれへのアクセスというイメージを喚起する装置として、かくも典型的なものはない<sup>37)</sup>。

天窗から差し込む光が規則正しく分類された多様な秩序をあまねく照らします、そんな楽園のような空間として「大閲覧室」の誕生を指摘せねばならないだろう。「円形閲覧室の発明」は「一望性」に画期をもたらした。たとえば十九世紀半ばに完成した、パニッツィそしてスマークによる大英博物館の円形閲覧室の空間設計である。

大英博物館の建築の目玉の一つとなっているこの閲覧室は、巨大なドーム状の天蓋がかぶさった円形空間であり、閲覧席の列は、輻のかたちと言ったらいいのか、中心から円弧に向かって八方に伸びた半径の形状に配されている。中央には二重の同心円をなすようなかたちに書架が据えられ、そこには利用者が日常的に利用する辞書、事典、目録等の参考図書が収められている。また、ぐるり周囲の湾曲した壁面も何層かの書架で埋め尽くされ、そこにもまた参考図書がぎっしりと詰め込まれている。その上には大きな明かり取りの天窗が並んでいるが、その一つ一つもまた上方が半円に切り取られた形状で、そこから陽光が落ちてくるさまは全体として光の円弧の連鎖といった趣きになっている。丸天井、円弧、半径、同心円といった具合に、すべての要素が円形性を強調するかたちに配置されたこの空間の内部に身を置くと、図書館利用者＝「読者」は、あたかも現実世界のまなましい出来事から切り離された「知」のミクロコスモスの内部に、心地よく閉じこめられてしまったかのような安心感を覚えずにはいない<sup>38)</sup>。

そしてベーコン以来構想されてきた知の形態は、その「一望性」とともに「一望監視」として体現をみる。いまいちど富永の導きに従って光の館へ戻るなら、「その世界の中心である光の空間の、さらに中心の部分に「この王国の眼」であるソロモンの館という装置が位置していたのだ。ベンセレムの島と外部世界との関係は、「けっして平等な、対称をなす関係にはなく、前者は後者にたいしてちょうどフーコーが『監獄の誕生』で注目したベンサムのパノプティコンのような構造を呈していた。この一望監視装置からは世界のすべてが見え、あるいはあらゆる知識すなわち光がそこには集中している」と富永は述べる。「聖書の神が世界に光を発散する中心であるとすれば、この島は世界の光が集中する中心」なのである。

大英博物館図書館閲覧室の放射状のレイアウト、なかでも「図書館員を中心にして閲覧者を周囲に配置するというパニッツィのアイデア、そして閲覧室と隣接した同じ階に巨大な書庫を設置したこと」は「革新的」であったとされる<sup>39)</sup>。同様の円形閲覧室は他にも存在するが、その目的が監視であれ、通気であれ、採光であれ、明るく開けた見通しのよい空間に放射状に配置された何列もの書架の光景は、われわれにたやすくベンサム＝フーコーのパノプティコン装置を連想させる。

あるいは動物園という施設の歴史を辿ってみるのもよいだろう<sup>40)</sup>。近代的な動物園としては、神聖ローマ帝国皇帝フランツ一世によって1753年、シェンブルンに設置されたものが最初といわれている。このシェンブルン禽獣園では、中央に位置する小高い丘とそこに建てられた

四阿を中心とし、そこから放射線状に十三の飼育舎が配置されていたのだった。これを皇帝たちは朝食をとりつつ、中央に位置する八角形のパヴィリオンから一望のもとに収めた。

渡辺守雄は動物園とユートピア思想の親和性を指摘し、理想都市の平面図とヴェルサイユやシェンブルンの禽獣園の空間配置を比較している。ルイ十四世によってヴェルサイユ宮殿内に置かれた禽獣園はシェンブルンの範とされたのだが、1663年に完成、そこでも「ドーム屋根をいただいて中央にそびえる八角形の建物の上階には、国王が賓客とともに動物を見渡すことができるように、大きな窓を八面に設けた部屋が用意された。その高台からは、それぞれ別の種類の動物が囲われた七つの区画と、残りの一区画では動物園の入り口に伸びている通路に臣下が徘徊する姿が見渡せたはずである」という<sup>41)</sup>。さらに渡辺は、『ニュー・アトランティス』に描かれた理想の動物園から百科全書へといたる補助線に言及しつつ、われわれの関心に沿って次のように指摘している。「すべての知識を集め、それを書物という空間のなかに体系だてて並べ替えるという『百科全書』の思想は、地球上に散らばっているすべての動物を、ある特定の空間に集めて主権者の視線にさらすという近代動物園の思想と近似的関係にある」。まさにノアの方舟以来のコレクション神話なのであった<sup>42)</sup>。

これら禽獣園に編み込まれた空間の権力を参照するなら、たしかにフーコーが「〈一望監視施設〉は一種の王立動物飼育場」であり「〈一望監視施設〉もまた博物学者の所産である」と指摘していたことを忘れてはならない<sup>43)</sup>。先に引用した『知の庭園』のなかで松浦は、それがある種の主体化する知の装置として、図書館、美術館、博物館、植物園、温室、動物園、オペラハウスなどの各施設に通底する仕掛けであったことを説得的に論じている。

リヴィングストンの言によれば、「動物界に秩序を押しつけ、固定された一直線の通路に沿って展示を並べ、危険な巨大肉食獣を、ちょっかいを出せる手の長さだけ離して檻に入れることで、一九世紀の動物園は野生に対する人間の勝利を厳かに宣言した」。それは「脅威となる自然の混沌に対して人間の組織の強制を再現し喧伝」する役割を果たした。その意味では、もともと「ある種の天国」とみなされていた庭園も、「混沌を克服する秩序、荒野に敵対する耕作、自然に対抗する技芸を表象する能力に依存」した「理性と非理性のあいだの線引きとなる」ものだった<sup>44)</sup>。

だが、人間の「理性」を構成するこのような「一覽性」「一望性」への志向が、じっさいにいかなる運命を辿ったかについてはいささか興味深い消息がある。たとえば先に述べられたような「大閲覧室」の空間にじっさい身を置くと、ひとにどのような経験が訪れるかについて松浦は詳述している。たしかに一望のもとに収められた蔵書がひとに「所有」の感覚を与え、なんらかのかたちで権力への意志を満足させただろうことは想像に難くない。モンテーニュの書斎なども有名であるように、それは無限の知を所有する全能感をもたらすだろう。しかし「全世界」を所有するかのような同じ「無限性」は、その所有（候補）者ないし閲覧者を、一種の恐怖や畏怖におとし入れるものであった。すなわち端的には、ここに並ぶこれらすべての書物を読みとおすことは不可能である、あるいはこれではまだ「世界のすべて」の所有には遠く及ばないという限界の認識である。そこにひとが体験しはじめるのは、「知」を所有しようという全能の幻想と、その「無限」性に圧倒されることのおののきである。無限の知の可能

性は、同時にその不可能性でもってひとを圧倒する。この両義性、包容と拒絶が一度におしよせてくるのが、さきの「大閲覧室」のような装置の効果であるというのである<sup>45)</sup>。

これら大英博物館図書館やフランス国立図書館の「閲覧室」を訪問しながら認められるのは、その親密と疎遠の両義的感覚である。ここでの知と主体との関係は特別であろう。壁面いっばいに配列された書架のなかに無数に詰め込まれ、整然と分類され所定の位置に配置された書物の群れは、なかにいる人間に対して独特の圧力でもって迫ってくる。それは、すこしがんばれば手が届きそうで、しかしけっして届かない「知の総体」を示す。松浦によれば、まさにこの大閲覧室の空間構造こそがひとに、きわめて近代的といえる理想と現実の逆説や背反を体験させる装置だった。それはしかしパノプティコンによる効果と同様に、「近代的な（知の）主体」を独特の仕方ではぐくみ出したのだ。

事実としても、出版される膨大な「書物」とそれが体現する「知識」の量はとどまることをしらず、もはや現実的存在としての一個人の手に負えるものではなくなっていた。「17世紀、ガブリエル・ノーデは、図書館の中央に立てば既知の情報のすべてが書架に並んでいるのが見える状態を理想としていた。18世紀末には、これは早くも実現不可能な夢となった」という<sup>46)</sup>。増え続ける一方の膨大な書物の堆積を前に、それをどう分類し整理し保管するかというのは永遠の課題である。この課題にひとは直面しはじめていた。

いくつかの小さな閲覧室に分散する、ないし別棟や地下に保管庫を増設するというのが現実的な解決策である。だがひとは、自身の所有と管理の実感を得るため、一望の下に見渡すことを欲しつつける。閲覧室は巨大化しつづげざるをえない。果てにあるのは、ブーレーによる、1784年の王立図書館再建計画案である。この実現しなかった設計図を典型として、ひとは半円筒のヴォールトのもとホール式の空間を設け、壁面に沿って無数の書物を配架するというイメージにとらわれつづけていた。「歴史や文学あるいは科学にいたるまで、あらゆる学芸を引き受けようとする図書館におけるメガロマニアは、数の大きさを感覚的に先取りし、「百科事典＝図書館＝近代的秩序」というメタファへと広げていった。そのメタファを引き受ける壮大な秩序を、ブーレーはラファエロの『アテネの学堂』をモチーフにして巨大な大閲覧室として表現してみせたのだ」と桂英史はいう<sup>47)</sup>。

だが、ブーレーの建築案が実現をみることはなかったように、いまや所蔵するすべての図書を一室に、しかも一望のもとに収めることは非現実的な課題だった。ここにひとは秩序と混沌がかならずしも別物でないことに、過剰なコレクションの集積は分類や秩序や体系をみずから裏切っていくものであることに、うすうすながら気がつきはじめる。〈図書館〉ないし〈大閲覧室〉という舞台においてひとは、この世のありとあらゆる知識の蒐集とその無限性、はてしない欲望とその不可能性を、特有の視覚化された形態において体感しはじめるのである<sup>48)</sup>。

こうして図書館をめぐる近代初期に起こった変革の中心に、書庫と閲覧室の決定的分離があった。近代そのものを支えもした「一覽性」「一望性」という理念ないし欲望は、閲覧室という装置において実現されるはずだった。だが現実には、膨れあがった蔵書数と情報量が、かつてのような「一覽性」をそもそも不可能なものとした。いきおい、周密な書庫という不可視で非一望的な暗い場所に頼らざるを得なくなる。

この「一覽性」への欲望と挫折を前にして、しかしここで問わねばならないのは、こうした理念的な一望監視の空間が可能であり実現されたとして、それははたして単純な幸福を意味するかどうかという点である。たしかに飼い馴らされた禽獣たちをすこし離れた高みから見下ろし、一望に収めるといえるのはほどよい満足感を与える。だがこのささいな権力の行使には、なおこちらの理解や統御を越えた、なにか不気味なものへの不安や畏怖が宿ってはいないだろうか。一望監視の側にいるものたちは、みずから刃向かってくるものの気配をそこはかたなく感じつつあるからこそ、自分たちをそのような高みに置こうとするのでないか。

松浦は、プーイサックによるサーカスの記号学に依拠しながら、「馴致可能性とその不可能性との間の、こうしたきわどい釣り合い」から生まれる、動物園という空間のアンビヴァレントな魅惑について語っていた。すなわち「確固とした境界」を「あくまで温存したまま、距離を隔てた安全な場所から、境界越しに視線を投げかけてみたいという市民の虫の良い欲望に応えるスペクタクルを提示するのが、動物園のまず第一の目的」なのだが、「この距離がいきなり廃棄される非現実的瞬間に向けて投射された戦慄的なファンタズム」がなおひとをとらえつづけるというのである<sup>49)</sup>。

「このうずうずするような宙づり状態」にどうしても耐えられなくなったとき、本当の悲劇は起きる。動物園に設けられた手すりの柵は、その意味では、それを乗り越えてしまいたいという人間の思いがあるからこそ存在するものである。『ジュラシック・パーク』や『ナイト・ミュージアム』のような、強迫ともいべき破局への衝動はこの感覚を描きだすものだろう。

同様のことが図書館についても指摘しうる。真夜中の図書館の夢想や、図書館警察などの都市伝説。あるいは図書館や書齋において訪れる破局の瞬間。蔵書家なら誰もが知るように、コレクションは例外なく人間の手に負えなくなる。散乱する図書、崩れゆく蔵書。理性的秩序にとって永遠に手に負えないもの、それは「蔵書」そのものなのである。大量の書物の実在は秩序と整理に反する。もはや分類と整序は難業なのだ。

この点で、おそらく世界でもっともよく知られた図書館小説が、「秩序」と「混沌」の表裏一体性を示すだろう。「バベル」に擬されるその建物をゆっくりと訪問してみることにしよう。

## 注

- 1) Garfinkel, H., *Studies in Ethnomethodology*, Polity Press, 1967, p. vii.
- 2) W. F. バーズール (根本彰ほか訳) 『電子図書館の神話』 勁草書房、1996年、p. 4。バーズールは、二十世紀後半になって登場した「電子図書館ないし仮想図書館」の神話に対し、「場所としての図書館」という神話を対比させながら論を進める。
- 3) トポスとしての建築については、記憶術との関連からも興味深い議論が示唆される。R. ベルギーニ (伊藤博明・伊藤和行訳) 『哲学的建築』 ありな書房、1996年など。
- 4) U. ナウマン (鈴木圭介訳) 「図書館建築小史」(『DETAIL JAPAN 特集ライブラリー』 第1巻2号、リード・ビジネス・インフォメーション、2005年)。
- 5) この分析の水準に身を置きながら、われわれは本研究の後半部において、M. フーコーとともに「ユートピア」対「ヘテロトピア」の概念で語ろうとするだろう。
- 6) 五十嵐太郎 『映画の建築／建築的映画』 春秋社、2009年；森山高至 『マンガ建築考』 技術評論社、2011年など。



- 7) 根本彰『理想の図書館とは何か』ミネルヴァ書房、2011年。
- 8) 「第一級の社会的現象であると思われる図書館が、社会学の文献中において論題にされておらず、また同じく図書館関係の著作においても社会的思索展開は何ら見あたらない」とP. カールシュテットが記した(加藤一英・河井弘志訳『図書館社会学』日本図書館協会)のは半世紀以上も前のことだが、いまだ事情に変化はないように思われる。
- なお、ひろく書物が集積、収蔵、保管あるいは利用に供される場所を示す一般的な用語が存在しないため、典型的イメージとしてここでは「図書館」の用語に依拠するが、もちろん狭義に限定されるものではない。「Library」の語は、本の集積それじたいを指す場合もあれば、大小公私を問わずそれが集積される空間や施設を意味する場合もある。文書室、書斎、閲覧室、書庫はもちろん、書店、古書店、貸本屋、さらには書店形式の娯楽施設なども含む、広義の概念として理解されたい。また後にも論じられるように、関連する施設として博物館、蒐集室、植物園、動物園、水族館、遊園地、等々とも問題の系は共有される。
- 9) J. L. ボルヘス(野谷文昭訳)「盲目について」(『七つの夜』岩波文庫、2011年、所収)。ただし訳文に変更を加えている。
- 10) 海野弘『部屋の宇宙誌』TBS プリタニカ、1983年。
- 11) 根本彰『場所としての図書館・空間としての図書館』学文社、2015年。
- 12) 『東方新報』2018年2月3日付記事より。
- 13) J. W. P. キャンベル(桂英史監修、野中邦子・高橋早苗訳)『美しい知の遺産 世界の図書館』河出書房新社、2014年、p. 19、pp. 46ff。
- 14) A. パワーズ(今井由美子訳)『自宅の書棚』産調出版、2000年；D. トンプソン(田中敦子訳)『素敵な蔵書と本棚』産調出版、2012年など。また、コレクターとしても知られる鹿島茂は、革装の古書を収めたみずからの書庫を「重厚な書斎イメージが欲しい人」に向けた撮影用スタジオとして活用し、蔵書家固有の難題すなわち収納・資金上の問題への方策としている。愛書家として「古書は売らないが古書のイメージを売る商売」なのだそう(新潮社編『私の本棚』新潮文庫、2016年)。
- 15) B. マック「図書館の神話」(J. E. ブッシュマン、G. J. レッキー編(川崎良孝ほか訳)『場としての図書館：歴史、コミュニティ、文化』日本図書館協会、2008年、所収)。
- 16) U. エーコ「極私的リスト」(和田忠彦・小久保真理江訳『ウンベルト・エーコの小説講座』筑摩書房、2017年、所収)、p. 219。
- 17) 海野、前掲書、pp. 169ff。以下の記述も同書。
- 18) 図書館建築における「光」の役割については、桂英史『図書館建築の図像学』INAX、1994年も参照。
- 19) キャンベル、前掲書、p. 292。
- 20) すでに触れたように、ここでは〈図書館〉を最広義にとらえている。すなわち、書店や古書店、個人の書斎、文書庫、さらにはミュージアム全般にまで及ぶこともある。
- 21) A. マングエル(野中邦子訳)『読書礼讃』白水社、2014年。
- 22) 五十嵐太郎『映画の建築／建築的映画』春秋社、2009年；また都市表象に関する古典的研究としてK. リンチ(丹下健三・富田玲子訳)『都市のイメージ』岩波書店、2007年。
- 23) 場所の非本来的利用を主眼におくような設計上の議論が存在する。青木淳は、その厳密な使用方法が設計のなかに含まれた「遊園地」的な空間と、開かれた使用をあらかじめ許容する「原っぱ」的な空間とを対比させ、後者に建築の本質をみた。ただしそこでは、はじめから多機能を前提とした、なんでもありのファジーな空間でなく、特定の目的のために作られた機能的空間が別の仕方で行われることが肝要だと説いた(青木淳『原っぱと遊園地』王国社、2004年)。あるいは、コロンビアの図書館建設プロジェクトに関わった内藤廣が、その広場的空間の可能性に託している「建築の力」もまたこれに相当する。すなわち「建築という価値は「完結的」であってはならない。開かれていなければならない。空間的に開かれている、あるいは時間的に開かれている必要がある」(内藤廣『建築のちから』王国社、2009年、p. 19)。これはもはや建築論の枠を越え、文化論の領域に属する問題なのかもしれない。後述されるような「図書館に泊まりたい」という欲望もまた、こうした問題圏のなかで読み解かれねばならないだろう。

- 24) P. バイヤール (大浦康介訳) 『読んでいない本について堂々と語る方法』ちくま学芸文庫、2016年。
- 25) 飯島朋子 『図書館映画と映画文献』日本図書刊行会、2001年；飯島朋子 『映画の中の本屋と図書館』日本図書刊行会、2004年；飯島朋子 『映画の中の本屋と図書館 (後篇)』日本図書刊行会、2006年。
- 26) その意味で、場所としての建築は、物質としての文字ないし書物をめぐる議論と対応する。今福隆太 『身体としての書物』東京外国語大学出版会、2009年など。そしてもちろんわれわれは、「そこにある」図書館に気づくと同時にすでにそれを「読み」はじめている。
- 27) バーゾール、前掲書、p. 88。
- 28) E. クレイジャズ「七人の司書の館」(岸本佐知子編訳『コドモノセカイ』河出書房新社、2015年、所収)。
- 29) J. L. ボルヘス (鼓直訳) 『創造者』岩波文庫、2009年、p. 10。
- 30) Radford, G. P., "Flaubert, Foucault and the Bibliotheque Fantastique," *Library Trends* 46(4), 1998, p. 617.
- 31) 以下、F. ベーコン (川西進訳) 『ニュー・アトランティス』岩波文庫、2003年；富永茂樹「ソロモンの館へようこそ」(『ミュージアムと出会う』淡文社、1998年、所収) による。
- 32) D. リヴィングストン (梶雅範監訳) 『科学の地理学』法政大学出版局、2014年。
- 33) ベーコンから百科全書、万国博覧会を通してデューイへという系譜については多くの論者が指摘するところである。鷲見洋一『『百科全書』と世界図絵』岩波書店、2009年など。
- 34) 村田麻里子『思想としてのミュージアム』人文書院、2014年；渡辺守章、渡辺保、浅田彰『表象文化研究』放送大学教育振興会、2002年；吉見俊哉『博覧会の政治学』中公新書、1992年；鹿島茂『絶景、パリ万国博覧会』河出書房新社、1992年など。
- 35) デミ『パリ万国博覧会の歴史論』、W. ベンヤミン『パサージュ論』(岩波現代文庫) による引用。
- 36) キャンベル、前掲書、p. 264。
- 37) さきの図書館で育った少女の物語は、いわばこのプロセスを逆向きにたどり図書館の外へ向かうものだった。この行程がはたして「光から闇へ」となるかどうかについては検討が必要だろう。
- 38) 松浦寿輝『知の庭園』筑摩書房、1998年、pp. 9-12。
- 39) キャンベル、前掲書、p. 232。
- 40) 溝井裕一『動物園の文化史』勉誠出版、2014年；渡辺守雄ほか『動物園というメディア』青弓社、2000年。
- 41) 渡辺守雄ほか、前掲書、p. 23。
- 42) この意味で「ユートピア」としてのミュージアムが存在し、そしてそこに集められるのは全世界の「縮図」、ミクロコスモスとしてのコレクションである。
- 43) M. フーコー (田村俣訳) 『監獄の誕生』新潮社、1977年、p. 205。
- 44) リヴィングストン、前掲書、p. 80、pp. 64-66。
- 45) 松浦、前掲書。
- 46) キャンベル、前掲書、p. 207。
- 47) 桂英史『インタラクティヴ・マインド』NTT 出版、2002年、p. 23。
- 48) 代わりに実現したラブルースト設計案によるフランス国立図書館 (リシュリユー館) 閲覧室 (1867) では、「書庫が閲覧室から見えただめに、本を取りだす行為がひとつの見せ物になった」とキャンベルは指摘する (前掲書、p. 232)。
- 49) 松浦、前掲書、p. 244。

(以下次号)

(原稿受理日 2018年9月15日)